

# 平成 26 年度水産研究成果情報

課題名: アゲマキ母貝集団の効果的創出方法の検討

## [背景・ねらい]

アゲマキは、かつては佐賀県有明海の泥干潟で多く見られる二枚貝として、漁業生産の上でも極めて重要な位置を占めていたが、平成 2～3 年にかけて激減し、平成 4 年以降は 20 年以上ほとんど漁獲がない状態が続いている。

このため、種苗生産・放流技術を開発し、アゲマキ母貝集団の効果的な創出方法を確立することにより、資源の再生産サイクルの構築を図る。

## [成果]

- (1) 4月中旬から8月中旬まで、アゲマキ母貝を水温 20℃に調整した室内水槽で飼育したところ、天然母貝に比べ約1ヶ月早く採卵することができた。
- (2) 平成 21、23 年に太良町地先で放流した種苗は、一定密度で生残しており、9 月から 11 月に肥満度が低下することから、産卵したことが推定され、母貝集団として機能した可能性がある。
- (3) 放流用の稚貝(殻長約 8mm)約 120 万個を生産し、これらを佐賀県沿岸の 3 地区に放流した。

- (4) 放流直後の残存率低下対策として、放流区画内に塩ビ管を 1m 間隔で立て込んだ試験区(以下、塩ビ区)と 1mm 目合いの囲い網(被覆網)を設置した試験区(以下、囲い網区)について、放流から 106～118 日後の種苗残存率を比較した。残存率は、囲い網区で 26.4%、塩ビ区で 16.7%であり、対照区の 13.3%よりも高くなった。この結果、残存率低下の要因の一つとして、種苗の散逸が示唆された。また、囲い網等の対策により残存率向上に一定の効果が見られた。

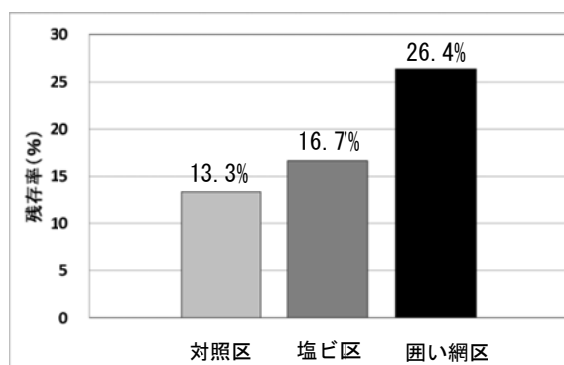


図 太良町地先の試験区別種苗残存率

## [課題・問題点]

- ・飼育水温による産卵コントロール(早期採卵等)は、今後も試験を継続し、検証する必要がある。
- ・塩ビ管や囲い網の設置効果を検証するため、今後も試験を継続し、散逸抑制効果を再検証する必要がある。
- ・これまでに母貝集団創出については一定の成果があがっているものの、未だアゲマキ資源の回復には至っていない。

## [今後の対応]

- ・産卵コントロールに関する試験を行い、検証を重ねる。
- ・塩ビ管や囲い網の設置による散逸抑制効果の再検証を行う。
- ・資源回復を加速するため、より大規模な種苗生産及び放流を行う。

## [その他]

研究期間: 平成 21 年～

研究担当者: 資源研究担当 神崎博幸